

◆海員随想

戦後日本の食糧支えた母船式漁業 興隆期の記憶をたどる④ 清水 陸明 当時は、通信長
【各部が船団事業の大事な脇役】

以後政府の計画造船によって老朽船は整理され、わが国海運界は急速に拡充されてゆくことになる。当社においても例外ではない。一般に水産会社という即漁船だけと考えられているが、日本は戦前からタンカー等の海運部門にも力を入れており、昭和 30 年代から 40 年代における船舶部所属船舶は、次のようになっており、固有船員の配乗は船舶部により行われる。捕鯨部＝捕鯨船、トロール部＝底曳漁業と船員の交流はない。

◎事業船 捕鯨母船 2 隻 (1.3～2 万総トン) オフシーズンには油槽船として外航に従事。
冷凍母船 4 隻 (8～9 千総トン)・カニ母船 2 隻 (8～9 千総トン)、捕鯨母船には冷凍工船として、北洋サケ・マス、ニシン、カレイ等には母船として、オフシーズンには貨物船となり外航に従事。ミール・スリ身母船 3 隻 (1～2 万総トン) 北洋ミール、スリ身船団事業。冷蔵運搬船 6 隻 (2～3 千総トン)。

◎運航船 タンカー 3 隻 (1.3～2.2 万総トン) 鉱石専用船 1 隻 (3.2 万総トン) 鉱油兼用船 2 隻 (一般商船) (5.4 総トン&10 万総トン) 母船式船団事業における主役は船団長であり船長であり、これを支える脇役の存在は見逃せない。

固有船員

甲板部＝航海士以下安全運航に努めながら、捕鯨事業では解剖甲板への揚鯨ウインチ、捕鯨船、仲積船、油槽船 (船団に補油、タンク掃除して鯨油積み取り後、パナマ運河経由欧州へ) との洋上接舷もあり、北洋鮭鱒事業では毎朝 30 隻の独航船からの水揚げ受取のウインチ操作を始め、船内用具の保守管理等多種多様にわたる業務をこなしてゆく。

機関部＝機関長以下メインエンジンはもちろん、その他、機関部関係機器の操作、また旋盤溶接等、高度な設備と優れた技術により自船のみならず船団全船の故障、破損箇所、部品の制作等遺憾なく能力を発揮している。

司厨部＝後に通信長の事務長兼務となるが、司厨長は事業部より増員される司厨要員も含め、全司厨員を統括して、ある時は捕鯨船または独航船に食材の分類補給作業に従事しながら、限られた食材から多彩なメニューを考案して豊かな食事を楽しませしてくれる。

無線部＝内地はもとより時には外国局と、自船団および他船団との交信。自船の弱電機器の保守管理に当たるが詳細は別に記す。

医務部＝乗船医師 1 人、看護資格を有する助手 2 人と共に、独航船を含めたケガ人、病人の診察治療に当たる。医務室が忙しいことはあまり歓迎することではないが、疲労の蓄積と共に結構繁盛することもある。

事業部

漁労部=主として指令室に勤務して情報の整理、漁況の把握に努め船団長を補佐する。(脇役というよりも、むしろ主役の一部門と言える)

製造部=多数の事業員を指導して漁獲物の選別、裁割、冷凍、塩蔵、缶詰の製造に携わり、乗船監督官の指示により生態観察の資料の収集保存等も行う。

事業部事務部

=各部の関係事務を一手に引き受け事務用品、資材の管理運用、船内新聞(無線部提供のニュースを元に編集して)の印刷発行。その他なんでもござれの事務処理を担当する。仲積船到来の時期ともなれば、公私を問わず郵便物の受付、内地からの郵便小荷物の船別、各部別に分類仕分け等、慰問袋のようなもので乗組員の期待も大きいだけに一層忙しさは倍増することになる。

これら多くの脇役の一致協力によって事業遂行が円滑に推移することになるが、ここではとりあえず無線部の特殊業務について、記述してみることにする。

「海員だより」